報　告

幼児期における喫煙防止教育のための教材開発
－紙芝居「はるのかぜにのって」－

○石川　正一*1　国広　勝代*1　西本　佳代*2　藤本　夏美*3

キーワード：喫煙防止教育、教材開発、紙芝居、幼児期

1　はじめに

平成７年に文部科学省（当時、文部省）から「喫煙防止教育の推進」に関する通知が各都道府県学校機関に対して行われた。そこには喫煙による健康被害を明示するとともに、法律で禁止されている未成年の喫煙を強く意識し、喫煙防止教育の徹底をはかることが述べられている。その中で学校教育の役割として、「喫煙防止教育をより早期から行えるよう、そのための教材の整備、指導者の研修等の環境づくりを推進するべきである。」とあり、早期からの喫煙防止教育の推進についても示されている。

小学校以上では喫煙防止教育が様々な機会を利用して行われ教材開発も進んでいるが、幼児期の喫煙防止教育に関する教材はほとんど開発されていないのが実情である。その理由としては幼児期から喫煙防止教育を始める必要性があるのかといった意見や、幼稚園や保育所のカリキュラムの中に位置づけることの難しさがあると思われる。一つ間違えば、幼児にとって無縁である喫煙に対して、興味を喚起する可能性さえある。だが、幼児を取り巻く喫煙環境は家庭を始め、地域社会の様々な場に存在しており、幼児がたばこのにおいを付着させながら違和感なく登園したり、年長者から喫煙を強要されたりしている実情なども報告されている。こうした問題は一見大人の問題のようにも感じられるが、喫煙に対する罪悪感の低下や、感性の鈍化等につながりかねず、幼児期の喫煙環境がやがて喫煙に至る、負のスパイラルに進む要因になる可能性もあると考えられる。そうならないためには幼児期にどのような喫煙防止教育が可能なのか。特に幼児期の発達を踏まえ、豊かな感性を損なうことなく、将来喫煙に対する自立した考えを持てる人間を育てるには、どのような教育的な配慮が可能なのかを検討しながら、教材開発を行う必要性があると考える。

確かに、成人の喫煙は法律で禁止されているわけではない。しかし、喫煙の健康被害、マナーの問題はすべての人々が共通して認識するべきであり、そこに喫煙防止教育の重要性が存在する。

そうした健康への正しい知識や認識を持つことや、社会性の発達に伴うマナー教育は幼児期であっても十分に可能なはずであり、そのための教材開発が活発に行われていくことは重要である。そこで、今回新たな教材として紙芝居「はるのかぜにのって」の製作を行った。

２　製作上の配慮点

始めに、幼児期の喫煙防止教育のあり方を考える中で、二つの問題を焦点化することにした。一つは喫煙による健康被害の問題であり、もう一つはマナー教育の問題である。今回はその中で健康被害につながる幼児期の喫煙防止教育を考えることとした。

喫煙が癌を誘発することや老化を加速させることなどは周知の事実である。こうした健康被害を引き起こす要因を幼児が自ら気づき、防御できる姿勢をどのように形成すべきかについて検討を行った。さらに、幼

*1　至誠館大学　ライフデザイン学部
*2　香川大学
*3　至誠館大学附属図書館

児期の豊かな感性を育てる幼児教育と喫煙防止がつながる接点をさぐり、教材開発を行った。

その結果、煙草の煙から発する「におい」に対する違和感を身につけることで、将来の喫煙防止につながると考えた。煙草のにおいは喫煙者にとっては特段気になる存在でもないが、喫煙をしない人にとっては違和感がある。こうした嗅覚による感覚の違いは喫煙防止教育にとって一つの切り口になると考える。そもそも、ものが燃えることによって発生する煙に含まれる有害物質をいち早く察知することは、生命ともかかわる大切な感覚であり、人間以外の動物にも共通するものである。こうした嗅覚を十分に働かせ生活をすれば、幼児期のにおいに対する感性を育てることになる。また、その感覚は、誰もが持つべき大切な感覚の一つであると考える。

一方、人の心を癒し、和ませるにおいの存在もある。海や山に足を踏み入れた時に、空気が美味しく感じられたり、花の良いにおいも感じたりすることが出来ることを忘れてはならない。そうしたにおいを感じられることによって生活を豊かにし、様々な文化が派生したことを考えれば、においを題材とした教育はまた重要である。

しかし、喫煙防止教育にとっては、煙草の煙に対して違和感を持てる感性と同時に、煙草が及ぼす健康被害に対する知性を身につけることが大切である。特に、幼児期の喫煙防止教育は煙草に対する知識を重要視するのではなく、煙草の煙に対する違和感、すなわち、においに対する感性を育てることが大切であると考える。それは幼児が生活する中で、嗅覚を働かせながらにおいに興味や関心をいだく機会を意図的につくることにもなる。現在では無煙社会の実現を目指し、特に物が燃えるにおいに触れる生活が少なくなっている。また、身近な動植物との触れ合いも少なくなったりする中で、様々なにおいと触れる機会が減少しているのも事実である。そうしたことを考慮し、子どもたちの生活環境の中で、においに興味を抱き、においに対する興味や関心を意図的に喚起することは幼児教育として大切なことである。

嗅覚が敏感になれば、煙草のにおいに関心を持つことになるだろうし、不快なにおいとしての感覚をもつことができるだろう。また、それだけでなく、もし、喫煙に至った場合でも、喫煙しない者の不快な気持ちを理解できると考えられる。

そこで、幼児期のにおいに対する興味や関心を喚起することによって、喫煙防止教育につながる教材開発を行うことに取り組んだ。

3　紙芝居製作

紙芝居のタイトルは「はるのかぜにのって」とした。タイトルの中に「はる」を使い季節を限定したのは、5月が世界喫煙防止月間に当たることを考慮し、春に読む紙芝居（教材）として容易に取り入れられることにも配慮してのことである。

紙芝居「はるのかぜにのって」の内容を紹介しよう。においに敏感なクンクンが野や山に散歩に出かけながら、春の風に運ばれる様々なにおいを感じ、良いにおいに出合った時は気持ちよく空に向かって満足そうに叫ぶ。しかし、山の中で煙のにおいに出合った時には嗅覚だけでなく聴覚や視覚、味覚までも働かせながら危険を察知し、必死に逃げて行く。ダンス君はしゃがんで目や口や鼻を押さえる。やがて、クンクンが運ぶ虹色の雨によってにおいの元を絶ち、再び春の風が良いにおいを運んで来てくれる。そして、クンクンとダンス君は春の風にのって一緒に安全な所に運ばれ、美味しいおにぎりを食べることになる。

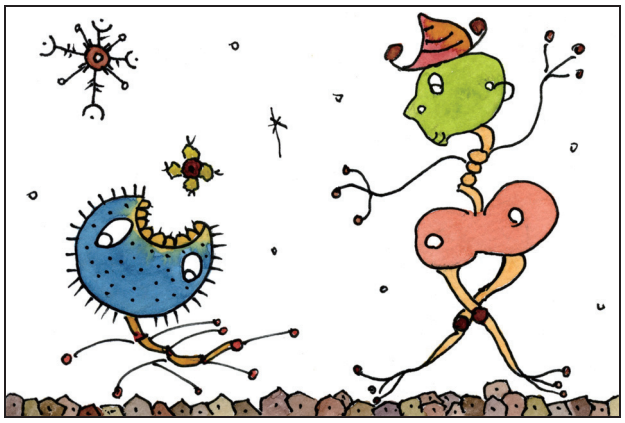
内容についてもなるべく事実に基づいて描いたつもりである。例えば、白い煙と黄色い煙といった表現は、100℃程度までは水蒸気による水煙で、150℃程度になるとヘミセルロースが燃焼して発生する喉を刺すような黄肌煙が出ることに由来している。また、苦味を感じるという表現も煙成分が水分（唾液）と一体となることから生じる現象からきている。

春はたくさんのにおいを感じる時期であり、世界禁煙デーは5月31日である。そんな春にこの紙芝居を上演し、子どもたちと一緒にクンクンになって春のにお

い探しの遊びをすることも可能である。

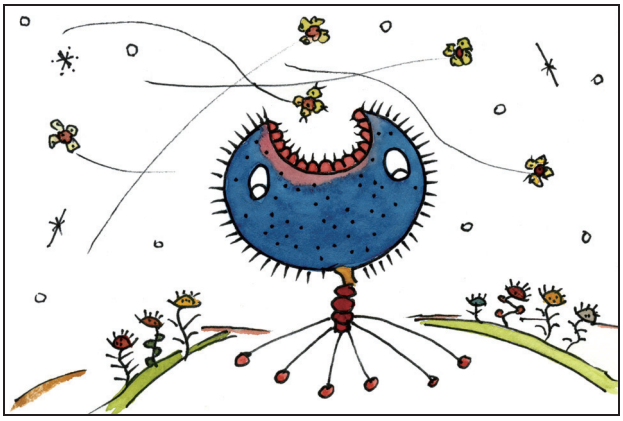
4　紙芝居　「はるのかぜにのって」

①やあ、こんにちは。
　みんな元気かい。
　ぼくの名はダンス。
　踊ることが大好き、おしゃれも大好き。
　ぼくには大好きな友達がいるんだ。



②名前はクンクン。
　クンクンはお散歩が大好き。
　それに、良いにおいが大好きなんだ。
　良いにおいをみつけると
　「クンクン」ってにおいを嗅いで、
　上を向いて「くうーーーっ」と
　大きな声を出すんだよ。
　でもね、変なにおいがすると、赤いべろを出して、
　苦い味がすると、突然丸くなって
　どこかに消えちゃうんだ。

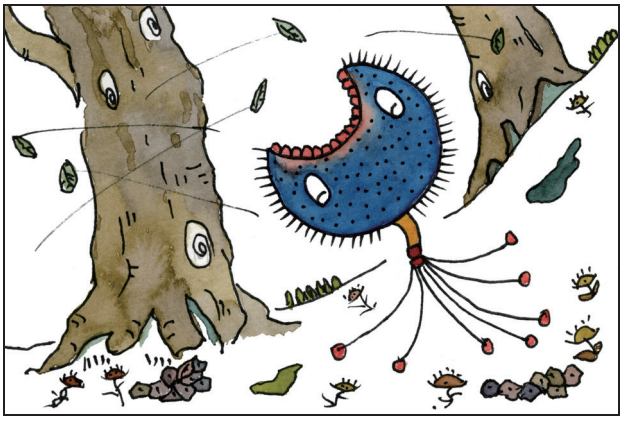
③ある春の晴れた日に、クンクンが
　「ねえねえダンス君、
　一緒に春のにおいを探しに行こうよ。」
　って言ったんだ。
　そこで、クンクンとぼくは
　ハイキングに出かけることにしたんだ。
　大きなおにぎり二個と水筒をもってね。
　しばらく行くと・・・



④お花の良いにおいがして、
　花色の風がすーっと吹いたんだ。
　その時クンクンが突然上を向いて
　「くうーーーっ」と大きな声を出したんだ。
　お花のいいにおいがいっぱいあったからね。
　空は青く、お日様もきらきらしていたよ。

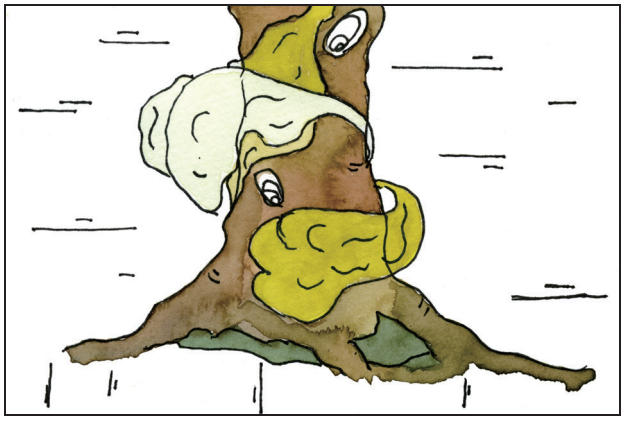
⑤クンクンの声を聞いて、
土の中からカエル君が顔を出した。
そこで、ぼくは
「やあ、春だね。」って言ったんだ。
それから、道端に咲くタンポポさんにも、
「やあ、春だね。」って。
楽しくて、楽しくて、ぼくは踊りながら
クンクンと歩いたんだ。

⑥それから、山に登ったんだ。
山には大きな大きな木があって、
空には葉っぱがたくさんあって、
少しひんやりしてたけど、
森にはいろんな生き物がいっぱいいたんだ。
木の上には鳥さんが、
木の下にはお花も咲いている。
木を登ったり降りたりするアリさんもいる。
土の中からミミズ君も顔を出す。
すると、木のあいだから
葉っぱ色の風が吹いたんだ。

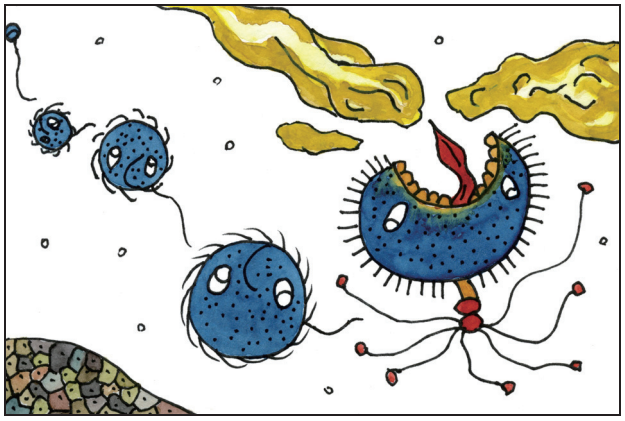


⑦クンクンは
「くうーーーっ」と背伸びして、
それを吸いこんだんだ。
そう、森の良いにおいが
たくさんあったからね。

⑧でも、まだ寝ている動物もいたよ。
眠そうだったのはたぬきさん。
ぼくは「やあ、もう少しで春だよ」って言った。
クマ君はまだぐっすり寝ていたので、
小さい声で
「やあ、まだ春は遠いよ」
って言ってやったんだ。
だって、大きないびきをかいて寝ていたんだもの。
本当はもう暖かい春なのにね。
ところが・・・

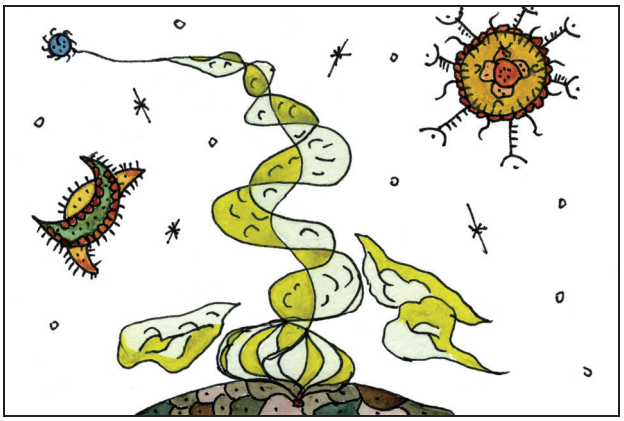


⑨突然風が止んだ。
鳥さんたちの声も消えて、
お花も静かに息を止めて、
みんな凍りついたように静まりかえった。
耳をすまして辺りを見回すと、
「ちり、ちり、しゅっ。」
「ちり、ちり、しゅっ。」
と何かが燃える音がした。
大きな木の向こうから、
白い煙と黄色い煙が立ち上ったんだ。
するとクンクンは空に向かって口を開け、
赤いべろを伸ばした。
真っ赤な長いべろを。

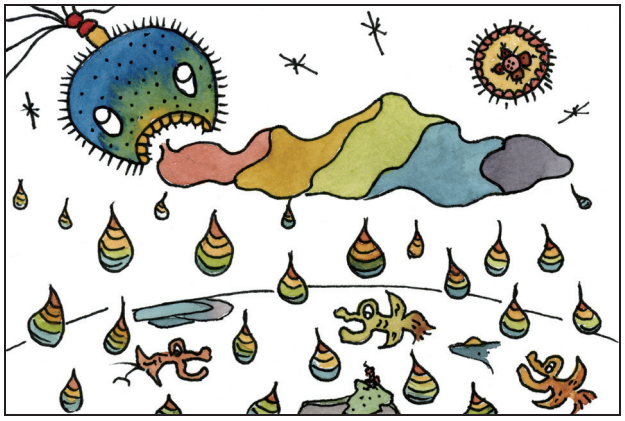


⑩突然クンクンは
「きゅうーーーん、きゅうーーーん」
と鳴いて、丸くなった。
苦しそうにもがいている。
次の瞬間、手と足をばたばたさせて、
からだをぐるぐる回転させると、
空に向かって一気に高く飛んだ。
そして、どこかに消えてしまった。
まるでロケットみたいに早くて、
ぼくは“クンクン”と呼ぶ暇も無かったんだ。

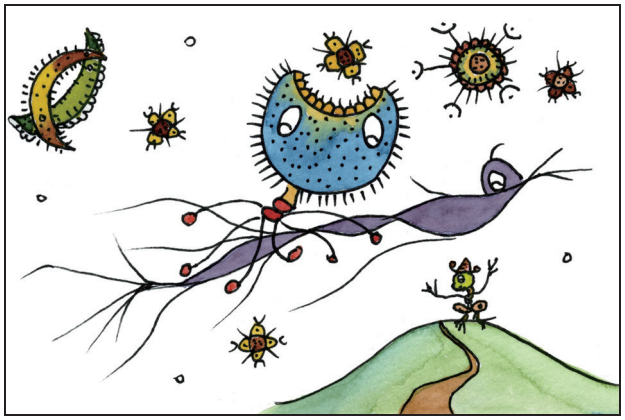
⑪ぼくはいやなにおいがして、
のどがヒリヒリチクチクして、
なんだか苦い味もした。
それから、
いやなにおいと煙に巻かれそうだったので、
必死にしゃがんで急いで鼻と口を押さえた。
目から涙も出てきた。



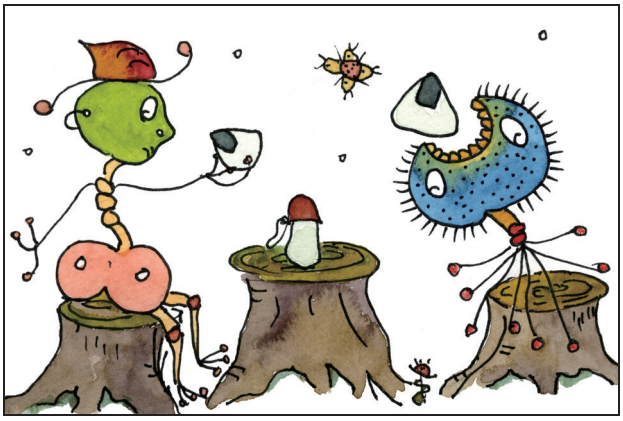
⑫白い煙と黄色い煙は
渦を巻いてまっすぐ空高く上っていく。
やがて、空に小さな点のようなものが見えた。
それが、だんだん大きくなってふくらんでいく。
赤いものが見えて、目が開いた。
「あっ、クンクンだ！」とぼくは叫んだ。



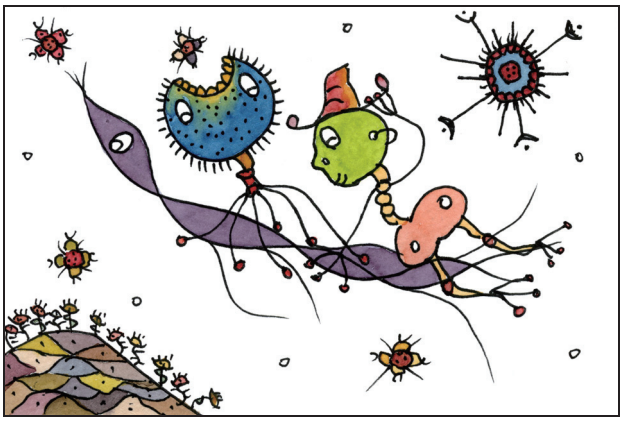
⑬そのとき、クンクンの大きな口から
まあるいフヨフヨした固まりが飛び出した。
それは次第に大きくなって落ちてくる。
すごい勢いで落ちてくる。
ぼくが“危ない！”と思った時、強い風が突然吹いて、
ふよふよした固まりは一気にはじけた。
そして、それは虹色の雨に変わった。
虹色の雨は次から次へと落ちてくる。
すると、「しゅっ。」と音がして、
黄色い煙が消え、白い煙も消えた。
いやなにおいもすっかり消えた。
ヒリヒリ、チクチクしていたぼくののどの痛みも
消えたんだ。苦い味もね。



⑭そのとき、クンクンが春の風に乗ってやってきた。
「クンクン、またあえたね。」ってぼくは言った。
「ダンス君、春のにおいがいっぱいだね。
いいにおいがいっぱいだね。」ってクンクンが言った。



⑮そして、一緒におにぎりを食べたんだ。
それから、家に帰ったんだ。
どうやって帰ったと思う？
実はね、



⑯ぼくとクンクンは春の風に乗って、
空を飛んで帰ったんだよ。
「ふうー。」

おわり

以上が製作した紙芝居である。

5　紙芝居と保育について

「幼稚園教育要領」では、総則において「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、教育の目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」と謳われており、「保育所保育指針」においても同様な考え方が示されている。

保育の方法は、子ども・保育者・環境の三つが複雑

に絡み合うなかで行われる。そのあり方は多様であり、園ごとにさまざまな保育方法があるが、その中心に子どもをおいて考えていかなければならない。その大切な原理として、民秋言は間接性、自由性、自発性、興味性、経験、個性重視、社会化をあげている。

子どもをとりまく環境は、ここ数十年間に大きく変化し、自然や遊び場の減少による直接的な体験が不足している。その一方でマスメディアからの情報は膨大になり、実体験を伴わない抽象的な知識だけが増える傾向にある。幼児期は、単に知る、覚えるということではなく、行動を通して「からだ」でわかるということが必要であり、そのことがその後の発達の基礎となる。「見る、 聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。」と領域「環境」のねらいにあるように、五感を駆使して経験することが大切である。

また、ここで取り上げている喫煙防止教育は、幼児教育における安全教育に位置づけられる。日常におけるさまざまな機会をとらえて、安全に対する意識を高め、「危険に気づく能力の育成」「危険を回避する能力の育成」「危険に対処する能力の育成」を図ることが重要である。

そして、安全能力形成のために必要な環境としては、次のような環境が挙げられる。

・自分のしたいことをみつけて遊ぶことのできる環境
・思いきりからだを動かして遊ぶことのできる環境
・考えたり、試したりして遊ぶことのできる環境
・友だちや多様な人とかかわることのできる環境
・動植物の世話をしたり、かわいがったりできる環境

幼児が、本学で開発した教材である紙芝居「はるのかぜにのって」を観たり、保育後の具体的経験として展開した遊びのなかで、においに興味や関心をもったりすることが、その後の喫煙防止教育の基礎となる感性を育て、感覚を養うことにつながると考えられる。

6　おわりに

喫煙防止教育を幼児期から始めるための教材づくりを行い、紙芝居「はるのかぜにのって」の製作を行った。喫煙に対する間接的な経験を積み上げることによって、最終的に喫煙を選択しない大人になることが重要である。幼児期は喫煙に対する知識を教えることではなく、子どもたちに興味や関心がもてる情報をあたえ、においに対する感性を育てることが大切である。それは、小学校やその後の学校教育につなげていくことができると考える。

紙芝居「はるのかぜにのって」は煙の発する「におい」をテーマに、幼児がにおいに興味や関心を持つことを主眼にしている。また、この紙芝居は、幼稚園や保育所などの保育現場では5月の喫煙防止月間と関連付けて教材として取り入れることも可能である。

今後は喫煙マナーについても同様な教材を検討していきたい。

（なお、紙芝居「はるのかぜにのって」は2012年に製作し、その後改訂をおこなったものである。）

謝辞　この教材を作成するにあたって、山口県萩健康福祉センター健康増進課地域保健班主査（当時）吉田弘子氏には多くの貴重な助言を頂きました。ここに感謝申し上げます。

参考文献

1）日本学校保健会；小学校喫煙防止に関する保健指導の手引，第一法規出版，1981
2）西本佳代、国広勝代、石川正一、吉田弘子；幼児をめぐる喫煙環境：「喫煙防止教育に関する調査」を手がかりとして，山口福祉文化大学研究紀要，7：77-83，2013
3）皆川興栄、川畑徹朗；喫煙防止教育のすすめ，ぎょうせい，1993
4 ）織田富士夫、小林賢二、原田幸男；喫煙防止教育の展開事例集，一橋出版，1988
5）民秋言編；保育原理，萌文書林，2009